

第 11 講 第一次世界大戦への道

ビスマルクの外交政策

ビスマルクの対外的膨張抑制策

復讐心に燃えるフランス、ドイツの台頭に不安を抱くロシア、イギリスの圧力と動向にドイツ自身絶えず意識せざるを得なくなる。ハードに対応するのか、ソフトに対応するのか。ビスマルクはソフトな対応を選択

軍備の抑制

陸軍：50万4千人（ロシア・フランスに次いで3番目）

海軍：19万トン（イギリス：67万9千トン、フランス：31万9千トン、
イタリア：24万2千トン、ロシア：18万トンに次いで5番目）

政治的に統一されたドイツが強大な軍事力を保有することによって周辺諸国に脅威となることを避けた

海外への進出を抑制

- (1) ヨーロッパでの領土拡大を断念する
- (2) ドイツのあらゆる膨張主義的運動を抑制する
- (3) ドイツ帝国建設によって締め出された「未回収の」ドイツ人、特にオーストリアとバルト海沿岸のドイツ人を統合しようという、大ドイツ主義的な願望を殺ぐ
- (4) 列強の植民地競争には参加しない
- (5) ヨーロッパ内での戦争を積極的に抑制する為に、ドイツは「ヨーロッパという起き上がり小法師の鉛の錘」

ヴィルヘルム 2 世（1890～1914）

世界強国の時代の中のドイツ

各国はヨーロッパの枠を超えて、ヨーロッパの外に拡大し、「世界政策」を追い求め、「世界強国」になろうとした。

大英帝国、フランス、オランダ、ベルギー

ヨーロッパは世界の中心だが全てではない。ドイツはヨーロッパの強国に転落。

イギリスとの関係は 1897 年の艦隊法までは良好だった。

ティルピッツの危険艦隊思想：ドイツ海軍はイギリス海軍よりも強力にはできないが、もしドイツ海軍と戦ってイギリスが勝っても、イギリス海軍は立ち直りがたい打撃を受ける。そのような危険を回避する為に、イギリスはドイツに接近して来るはずだし、その方がドイツにとって安全になる。

イギリスとの関係悪化

1902 日英同盟

1904 英仏協商

1907 英露協商

モロッコ（タンジール）事件（1905）

日露戦争による敗北でロシアは無力化・露仏同盟は一時的に麻痺したとドイツ参謀本部は考えた

モロッコを口実にフランスと決着をつける機会と考える



ロシアは介入できず、イギリスは中立

参謀本部のプランは外務省枢密顧問官カプリヴィの同意を得る



帝国宰相兼外務大臣ビューローを説得

ビューローは戦争を望まず、外交的勝利を求める

ロシアとの盟約も、イギリスとの協商も役に立たない事をフランスに知らせる場合によっては、イギリスをドイツと手を組ませる

カイザー自身：危機を望まなかったし、ましてや戦争を望んではいなかった
発言は高飛車で好戦的だったが、本当は繊細で神経質、且つ平和愛好的性格タンジールに派遣されるのを大層嫌がる



ビューローの目算は狂ってしまった

フランスの外相は辞任し、ビューロー自身は侯爵に列せられ、
アルヘシラスに列国会議が開かれ、自らのイニシアティブで国際危機
を出席国の全面了解で調整する見込みもあったが



アルヘシラス会議はドイツにとって失敗

オーストリア以外、フランスに反対しなかった

1908. 10 オーストリアとロシアの秘密協定

ロシアがトルコに回教の自由航行を要求してもオーストリアは抗議しない
オーストリアによるボスニア・ヘルツェゴビナ併合をロシアは認める



ロシアが英仏の了解を得る交渉をしている間に、オーストリアはボス
ニアとヘルツェゴビナを併合



セルビアの反発→併合を取り消さねば戦争に訴えると脅す



バルカンの危機はロシアの参戦・介入の危機を生み出す



ドイツはオーストリアの忠実な同盟者、ヨーロッパの仲裁者として介入



ロシアがセルビアを制止し、オーストリアによる併合を認めなければ、
ドイツはオーストリアを支持すると声明



ロシアの譲歩← 1) 日露戦争の痛手、 2) 1905年の革命から回復せ

ずドイツの外交的勝利だが、空しい勝利

1911 第二次モロッコ事件（アガディール事件）

失敗

↓

イギリスが初めて公然とフランスの同盟国と宣言

大蔵大臣のロイド＝ジョージの発言：

「フランスが脅されるのなら、イギリスは傍観しない」

ドイツでは挑戦と受け止められる

英仏の参謀本部会議

独仏戦争の場合、イギリスは軍を派遣し、仏軍の最左翼で行動すると決定

外交当局はイギリスとの了解を目指し、その中立化を期待する

錯覚：イギリスは大陸でのドイツの勝利と、その結果増大する世界強国ドイツの影響力を承認するつもりはなく、必ずフランスを支援するつもりであった

ドイツは計画段階の艦隊を実際の海軍力だと思い込んでいた→軍備制限を受け入れる意図を海軍長官のティルピッツもカイザーも持っていなかった

英仏双方の外交努力によって、戦争原因とされてきた両国の争点は解決されていた

1912 春 ホールデン使節 → ベートマン＝ホルヴェーク

1) 建艦競争の休戦 2) イギリスの中立化

失敗

1913 と 1914 二重の植民地調整

ドイツはポルトガルの植民地（アンゴラとモザンビーク）を購入

イギリスはポルトガル及びベルギーの植民地の一部を入手

↓

1914. 6 ロンドンで植民地配分に関する協定調印

ドイツとイギリスの利益範囲を設定

↓

ドイツ軍の矛先が西でなく東にのみ限定されるなら、イギリスは大陸の戦争に中立を取る可能性があった

この可能性を潰したのは参謀本部の計画、「シュリーフェン計画」、であった